

しかしそんな時だった。明らかに秋葉原に似つかわしくないDON達に声をかけられたのだ。

「DON」 「ねえねえ、君可愛いねえ、JK? それともJC? 家出少女かな?」

「DON」 「こんな時間にそんな恰好で今夜の寝床でも探してるの?」

「DON」 「カラオケいかない? お金がないなら俺達がおごつてあげるからさあ」

「DON」 「大丈夫大丈夫、何もしないから」



明らかに体目当て、下心丸出しのDON達だ。

これこれ、こういうヤバそうなバカを求めて町に出て来たんだ。でも今はそれどころじゃない。

「僕」 「一晩のお相手が欲しいなら、声をかける相手を間違えてますよ。」

家出でもないし、お金なら充分に持っています。トイレに行きたいので邪魔しないで買えますか?」

僕はそう冷たく言い放ち、そのままトイレの個室へと入って行った。

《ごぼっ…ぶびゅっ…どろり…》

僕がトイレの個室に入り、便器に腰かけて下腹部を強く手で押さえると、薄茶色に染まった体液が膣口からあふれ出してきた。

【僕】「ふう…危ない所だった…」

ついでにあふれ出してきたおしっこを眺めながら、下腹部を手で押さえ、どんどんと汚汁を吐き出して行く。膝をきゅつと抱えるように持ち上げると、腹筋が強く子宮を締め付け、どんどん汚汁があふれ出して来た。

【僕】「んっ…♡ これでもう自然にあふれて来る事は無いだろ…♡」

汚汁があふれ出さなくなった所で、僕はオマンコを丁寧にふき取り、個室から出ていった。



しかし僕が個室から出ると、そこには先ほどのDQN達が待ち構えていたのだ。

「DQN」「待ってたぜ、お嬢ちゃん。そんなに太急ぎでトイレに駆け込んで、ウンコかな？」

「僕」「貴方達、さっきの……！　なんでこんな所にいるんですか！　さっさと出て行きなさいっ！」

「DQN」「おいおい、出て行けって言われても、

「ここ男子トイレなんだけど？　君の方こそヤベーンじゃないの？」

「僕」「えっ……？　あっ……！」

DQNの言葉にはっと気が付き周囲を見渡すと、そこには女子トイレにはない小便器が並んでいた。しまった、慌ててトイレに駆け込んだから、無意識に男子トイレに入ってしまったのか。ニヤニヤをいやらしい笑みを浮かべるDQNに、僕はじりじりと追い詰められていく。



「DQN」「こういう場所で君みたいな美少女ってのもアリだよな」

そう、この展開を期待してこの町へ来たのだ。
しかし、すんなり捕まっては面白くない。

軽く抵抗した方がDQNが燃えるだろうし、僕も
その方がレイプ感が強くなって興奮しそうだ。

DQNは僕を捕まえようとするが、僕は
DQNの手をひらひらとかわしていく。

「DQN」「こいつ、ちよこまかと逃げやがって！ ぶん殴るぞデメエー！」

「DQN」「待て！ 顔は殴るなよ！ 殴るなら腹にしとけ！」

「僕」「女性に手を上げるなんて、育ちが悪いんですね。やれるものならやってみなさいっ！」

僕がそう挑発すると、キレたDQNが僕の腹めがけてパンチを繰り出して来た。

勿論、簡単に食らってやるつもりはない。僕はそれをかわしながら、カウンターで蹴りを食らわせてやった。



《バキィー!》

僕の蹴りがDONにクリーンヒットした。

しかし、DONはしっかりと両腕でガードしていた。

いくら身体能力が高くとも、姫花の体重程度では、

ガードされれば大したダメージにはならない。

僕はそのまま蹴り足を掴み上げられてしまった。

【僕】「うぐっ…は、離しなさいっ…!」

【DON】「へへっ…これで癖の悪い足も使えねえな?」

【DON】「っておい! こいつよく見たらノーパンじゃねえか!?!」

【DON】「男子トイレに間違えて飛び込んだくらいだ、漏らして汚して捨てちまったのか?」

DONは僕のオマンコを眺めながら、ニヤニヤと勝ち誇った笑みを浮かべていた。

あの姫花がこんなDONにこんな汚いトイレでレイプされる。それを想像するだけで興奮が高まってくる。

【DON】「それじゃ、ご開帳と行きますか」

《にちゃっ……くばあっ……》

一人のDONが僕の片足を吊り上げたまま、他のDONが僕のオマシコを左右へ開いた。

【僕】「あっ！ こら、勝手にっ……！」

【DON】「なんだ、処女じゃねえのか。」

可愛い顔してやる事はやってやがんだな」

【DON】「こんな時間に出歩いている不良娘だからな。」

初体験の相手は誰だ？ どんなエリート学生だ？」

さっきトイレに入った時に、しつかり中の汁を絞り出して、綺麗にふき取っておいて良かった。僕はオマシコをヒクヒクさせる様子をDONに見せつけながら、DONの問いに回答する。



【僕】「私の初体験の相手? …学校のトイレブラシですが」

僕が堂々とそう言い放つと、

DQNは絶句した後、一斉に笑い始めた。

【DQN】「あっはっはっはっ!」

中々面白いジョークだな!

【DQN】「トイレブラシに処女を捧げるバカがいるかよ!」

【僕】「…あら、本当なのに。貴方達はこれから

そんな女の子を犯そうとしてるんですよ?」

【DQN】「レイプされたくない奴が、私は性病ですアピールするのと同じだな。もう少しマシな言い訳を考えろよ。よりによってトイレブラシは無いわ」

DQNは僕の話信じていないようだ。まあ当前だろう。

DQNは僕の言葉を一笑に付した後、僕の膣口へ中指を伸ばして来た。



《ぬぷっ……ぬちゅっうっうっ……》

DQNは僕の膣穴に、遠慮なく指を挿入した。

「僕」 「ひんっ!？ ああああっっ……!

な、何を勝手に入れてるんですかっ……!

「DQN」 「何って指だろ? 見てわかんねーの?」

「僕」 「そ、そういう意味じゃなっ……!

ひっ!？ んんんんっっっっっ♡♡♡♡

「DQN」 「おいおい、結構ユルユルになってるじゃねえか?

可愛い顔してとんだヤリマンだな、ほらもっとな締め付けろ」

DQNは僕の膣内に挿入した指で、膣内をぐちゅぐちゅとかき回す。

女慣れした指は、たちまち僕の弱い所を探り当て、そこを攻め立て始める。

ヤバイ、これは気持ちいい。僕はDQNの愛撫に応えるように、膣をぎゅっとな締め付ける。



【DQN】「おお、こいつめっちゃ反応してるぜ、面白っ」

DQNはそのまま、勢いよく中指を突き上げ、僕の膣内にある性感帯を勢いよく擦りあげる。

【僕】「あひっ……!? あああああっ……!!

やめっ……!! ひiiiiiiiiっ♡♡♡♡」

【DQN】「どうだ俺のテク、気持ちいいだろ?」

【DQN】「てか、指マンだけでこんなに善がるとは、

デメエの彼氏、下手糞すぎるんじゃないかねえの?」

【僕】「わ、私に彼氏なんかいないっ……ひっ!! あああああっ♡♡♡♡」

悔しいがこのDQNは女体を喜ばせるテクニクを持ち合わせているようだ。

指一本でこんなに気持ちよくさせられてしまうとは予想外だった。

僕はそのまま、DQNの指技に体を翻弄され、そのまま絶頂へ導かれてしまった。

《ぶしゃっ…びしゃあっ…》

僕は絶頂と同時に潮を噴き、そのまま腰をがくんがくんと前後に震わせてしまう。

【DQN】「おお、腰がへこへこしてるじゃんか。

俺の手マシ、そんなに良かったか？」

【僕】「だ、誰がっ…♡ 気持ちよくなんてっ…♡♡」

【DQN】「ネバネバの愛液垂れ流しておいて、

そんな事言っても説得力ねえよ」

【DQN】「さあ、たっぷり気持ちよくしてやったんだ。

今度は俺達が気持ちよくしてもらう番だぜ？」

そうして僕の足は解放されたが、立っているのもやつの状態だ。

そしてロクに動けない僕をニヤニヤ眺めつつ、一人目のDQNがペニスを露出させた。

ペニスを露出したDQNは僕の頭を掴み、そのままトイレの壁に押し付けてきた。
いかにもレイプという感じの所作で興奮してしまう。

「僕」「うぐっ…はあっ…はあっ…」

「DQN」「へへっ…どうだ俺のチンポは。」

お前の彼氏よりも立派だろ？」

僕が振り向くと、DQNが勃起チンポを見せつけてきた。

自分で言うだけあって確かに立派だ。

僕はゴクリと生唾を飲んだ後、一応煽っておいた。

「僕」「グスグス…そ、その程度で立派だなんて、

随分と自意識過剰なんですね…」



「DON」『本当に口の減らねえ生意気な女だな。まあいいさ。
その強気がいつまで続くか、楽しみだなあ?』

そしてDONは僕の半開きの割れ目にペニスをあてがい、
何の遠慮もなく、慣れた腰つきで僕の中に入り込んだ。

『ずぶっ…ずにゅうううつつっ…!』

「僕」『ひっ♡ おほおおおおおつつ♡♡♡』

「DON」『おい、さっきまでの強気はどうした?』

チンポが入った途端このザマかよ!』

僕は何も言い返す事が出来なかった。



「DON」 「チツ：指突っ込んだ時にも思ったが、やっぱりユルいわコイツ。
こんな可愛い顔してユルマンとか、普段どんなチンポくわえてんだ？
まあいいや、頑張っつて締め付けるよ？」

《どちゅっ！ ずちゅっ！ ぶちゅっ！》

DONは悪態をつきながらも、僕の膣奥にペニスを
力強く叩きつけ、ピストンを繰り返した。
僕もDONの命令に従い、オマンコを締め付ける。

「DON」 「へへっ、やればできるじゃねえか。
そうそう、そのまま締めとけよ！」

「僕」 「はひっっ♡ ああああっっ♡♡♡」



「DQN」 「それにしてもコイツ、締め付けはユルい癖に、ずいぶん奥まで入るな？」

おい、お前のマンコどうなってるんだ？ 正直に話せよ？」

「僕」 「あっ…♡ わ、私っ…子宮口が開いててっ…♡

子宮の中に…入るようになってっ…♡」

「DQN」 「すげえな、子宮の中まで開発済みかよ。」

とんでもねえ変態女だなお前は！」

《ぐちゅっ！ どちゅんっ！ ぶちゅっ！》

DQNは子宮という言葉聞いて興奮したのが、よりペニスを固くして、僕の最深部を突き上げる。僕もそれに合わせて締め付け、刺激を与えていく。僕はDQNの限界に近い事を感じていた。



「DON」「へへっ…それじゃあ子宮の中にたっぷり出してやるからな？」

その年で母親になりたくなかったら、後でちゃんと避妊しとけよ？」

「僕」「えっ？ あっ…あああああつつつつ…♡」

《びゅるっ！ どびゅるるるつつつつっ！…！！》

DONは僕の子宮の中にペニスを突っ込んだまま、勢いよく大量の精液を吐き出して行った。

考えてみたら、人間相手のセックスは、浮浪者と校長しかなく、どちらもそれなりに高齢だった。

しかしこのDONは若くてたくましく、彼らとは比較にならない勢いで射精していく。

僕は精液がしみ込むその感触で絶頂した。



「僕」「あっ……♡ ああああっっ……♡♡♡ な、中で出てるっ……♡」
「DQN」「ほら、まだ終わってねえぞ、しっかり締め付けるや」

《びゅくっ……びゅくっ……びゅるっ……》

僕は精液による絶頂で体をビクンと震わせながら、DQNの命令に従い、オマンコを締め付ける。DQNの精液は、まるで排泄行為をしているのかと思うほど長く続き、僕の子宮を白く染めていく。しかし緩んだ膣はそれをとどめる事ができず、隙間から大量に外へとあふれ出させて行つた。挿入時からそうだったが、悔しいが女を喜ばせるテクニックだけは最高だ。僕の体は歓喜に震えた。



そしてDQNは、僕の中を真っ白に染め上げるほど射精した後、余韻を楽しむように、ゆっくりとペニスを引き抜いた。

《ずるっ…ごぼっ…》

【僕】「んっ…♡ はあっ…はあっ…♡」

【DQN】「締め付けは全体的に緩めだったけど、顔もいいし、子宮にも突っ込めたし、まあまあ気持ち良かったぜ？」

【僕】「うぐっ…♡ な、なに勝手な事をっ…♡」

DQNは聞いてもいない批評を述べた後、後ろで待っていた他のDQNにバトンタッチした。

